

令和8年度 国立中央青少年交流の家 教育事業
富士のさと ボランティア養成セミナー
 令和8年6月13日（土）～6月14日（日） 1泊2日



1.趣旨

青少年の体験活動を支援するために必要な基本的な知識・技能を、養成カリキュラムに基づいて習得するとともに、ボランティア活動への意欲を高め、さまざまな青少年教育の現場で青少年指導者をサポートできる人材を養成する。

2.参加者

48名（募集40名、応募50名）
 うち高校生15名、大学生31名、社会人2名

3.協力

遠藤 知里 教授（常葉大学短期大学部保育科教授、講義『青少年を知ろう！』講師）

4.事業内容

9:40	10:15	10:30	12:00	13:00	14:10	15:20	17:00	17:20	18:00	19:00	21:00	22:00
受付	開 会 式	ボランティアに ついて知ろう！	昼食	交流の家を 知ろう！	ボランティア の活動を 知ろう！	青少年を 知ろう！	タベ のつ どい	夕食	安全のための 知識を 学ぼう！①	たき火 をしよう！	入浴	消灯
6:00	7:00	7:20	8:30	9:00	13:00	15:00	15:30	16:30	17:00			
起床	朝 の つ どい	朝食	退所 点検	野外炊事を してみよう！	安全のための 知識を学ぼう！②	振 り 返 り	法人 ボラン ティア 制度を知 ろう！	閉会式	解散			

【事業1日目】6月13日（土）

（1）ボランティアについて知ろう！（科目：ボランティア活動の意義）

講師：国立中央青少年交流の家 事業推進室主事 川端 斗和

法人ボランティアの意義およびボランティア活動における心構えを学ぶことを目的として、スライドを用いた講義とアイスブレイクを兼ねたレクリエーション活動を組み合わせて実施した。

講義では、見返りを求めず自らの意思で社会に関わる活動がボランティア活動であることを理解するとともに、法人ボランティアには「青少年教育のサポーター」としての役割があることを学び、今後の研修に向けた動機づけを図った。また、レクリエーション活動を通して、学校や家庭では得られない社会教育の場としての意義について考え、活動において常に「子供のためになっているのか」という視点を持ちながら行動することが、ボランティアとしての重要な心構えであることを学んだ。

（2）交流の家を知ろう！（科目：青少年教育施設の現状と運営）

講師：国立中央青少年交流の家 所長 藤原 一成

法人ボランティアの基盤となる国立青少年教育振興機構および国立中央青少年交流の家について理解を深めることを目的として、両者の成り立ちや、青少年教育施設の教育機能・役割・運営について学んだ。

参加者は、国立中央青少年交流の家が日本で初めて設置された国立青少年教育施設であり、団体宿泊の受入れに加え、青少年教育のナショナルセンターとして先駆的・先導的な教育事業を展開していることを理解した。また、独立行政法人の社会的意義や、青少年教育における直接体験の重要性について認識を深めた。さらに、講義では言葉の意味について考える問いかけが多く取り入れられ、日頃何気なく使用している言葉の意味を改めて見つめ直す契機となった。

(3) ボランティアの活動を知ろう！(科目：青少年教育施設におけるボランティア活動)

講師：国立中央青少年交流の家 事業推進室主事 川端 斗和

参加者がボランティア活動の具体的なイメージを持つことを目的として、教育事業の紹介および現役ボランティアとのトークセッションを実施した。教育事業の紹介では、昨年度の活動実績をもとに写真を交えながら、今年度実施予定の教育事業について説明した。また、現役ボランティアとのトークセッションでは、「ボランティアを始めたきっかけ」や「活動の中で印象に残っている出来事」などについて話してもらい、実際の活動経験や思いを参加者に伝えた。

参加者は、各教育事業におけるボランティア活動の内容を具体的にイメージすることができ、自身が参加してみたい事業を考える機会となった。また、現役ボランティアの体験談を通して、ボランティア活動をより身近なものとして捉え、参加への心理的なハードルを下げるきっかけとなった。

(4) 青少年を知ろう！(科目：青少年教育)

講師：常葉大学短期大学部保育科教授 遠藤 知里 氏

指導者としてのかかわりに子供の視点を取り入れることを目的として、実際の自然体験活動の現場で発生した事例をもとに解決方法を検討する「インシデント・プロセス法」を実施した。参加者は、実際に起こった子供に関する事例について、子供の特性や背景、活動環境、人間関係など多様な視点から分析し、複数の要因や対応方法を検討した。

また、唯一の正解がない事例を通して、「子供の視点」を常に意識しながら、子供を理解するための対話を継続することの重要性を学んだ。さらに、グループで意見を出し合うことで、多様な視点や対応方法を共有し、課題解決に向けた考え方を深める機会となった。

(5) 安全のための知識を学ぼう/たき火をしよう！(科目：安全管理)

講師：国立中央青少年交流の家 事業推進室主事 郷原 直也

「夜のたき火・薪割り活動」を題材に、活動に潜む危険を洗い出し、その対応についてグループで話し合った。また、危険を「回避・軽減・転嫁・受容」の4つの視点で整理し、青少年教育における安全管理の考え方について理解を深めた。さらに、事例を基に身体的・心理的安全の両面からリスクへの対応を検討し、子供の成長と意思を尊重しながら、安全を確保するための判断の重要性を学んだ。

「安全＝事故防止」と捉えていた参加者からは、「子供の尊厳や心理的安全も安全管理の一部であることを初めて意識した」「リスクはなくすだけではなく、軽減や受容を組み合わせる考えることが大切だと分かった」といった意見が挙げられた。グループ討議では、それぞれの立場によって判断が異なることを実感し、安全管理には明確な正解ではなく、根拠をもって最善の判断を積み重ねる姿勢が重要であることへの認識を高めた。

事業1日目の様子



ボランティアについて知ろう！



交流の家について知ろう！



ボランティアの活動を知ろう！



青少年を知ろう！



安全のための知識を学ぼう①



たき火をしよう！

（6）野外炊事をしてみよう！（科目：ボランティア活動の技術）

講師：国立中央青少年交流の家 事業推進室専門職 岡本 卓也

野外炊事を子供たちに実践させる前提で指導を行った。事前に火の取り扱いを学習していることを踏まえ、子供たちへ実際に説明する方法を考えさせた。具体的には、グループごとに場面を分けて担当し、それらをつなぎ合わせることで事前説明を完成させる手法をとった。説明に必須な要素を網羅しつつ、子供たちに伝わるよう言葉を工夫する姿が印象的であった。

その後、各グループでカレーライスを調理した。簡易的な作り方は提示したものの、ほぼ参加者自身の判断に委ねる形で実施した。何を確認すべきか、どのように役割分担をするか、火をおこすタイミングはいつかなど、子供たちが実際に行う事柄を一つずつ確認しながら作業を進めさせた。また、火がつかない、あるいは途中で消えた場合の対応や、他グループとの進捗差への対処など、トラブル対応を想定しながらの調理となった。結果として、概ねどのグループも上手にカレーを作ることができた。しかし、事前に注意した事柄が守られていない場面も散見され、全員に等しく物事を伝える難しさを互いに理解する機会となった。

（7）安全のための知識を学ぼう②（科目：安全管理）

講師：国立中央青少年交流の家 事業推進室長 宮崎 一彰

危険予知トレーニング（KYT）や AED・胸骨圧迫による救命講習、心理的安全性を確保するための対話手法である「インクルーシブトレーニング」を通して、現場で実践できる安全管理の手法や考え方について学んだ。講義ではグループワークを多く取り入れ、参加者は互いの価値観の違いを理解するとともに、子供とのかかわりの中でその違いをどのように受け止め、対応していくべきかについて考えを深めた。また、「安全管理とは何か」という問いかけを通して、身体的・心理的両面から安全管理について理解を深める機会となった。

講義の最後には、社会教育の現場で実際に発生した子供への性被害事例が紹介され、参加者はボランティアとしての言動や子供とのかかわりが子供に大きな影響を与えることを認識し、その責任について考えを整理する機会となった。

（8）振り返り/法人ボランティア制度を知ろう！（科目：青少年教育施設におけるボランティア活動）

講師：国立中央青少年交流の家 事業推進室主事 川端 斗和

本セミナーの振り返りは、個人での振り返りとグループワークに分けて実施した。個人での振り返りでは、「2 日間を通した日記を書く」を課題とし、場所を限定せず、それぞれがリラックスできる環境で 2 日間の学びや気づきを内省した。その後のグループワークでは、各講義を通して得た学びや気づき、自身の考えなどを話し合った。また、参加者同士が互いの学びを認め合うとともに、2 日間を共に過ごした仲間への感謝や励ましの言葉を交わす様子も見られた。

続いて実施した「法人ボランティアを知ろう！」では、ボランティア登録の手続きや実際の活動に参加するまでの流れについて説明した。また、ボランティアはあくまでも自主的な活動であることを改めて確認するとともに、今後の活動に向けた意識を高める機会となった。

事業2日目の様子



野外炊事をしてみよう！



安全のために知識を学ぼう②



閉会式

5.事後アンケート（回収率 100%）

（１）事業に対する評価

Q この事業全体の満足度はいかがでしたか？（事後アンケート）

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
41名（85.4%）	6名（12.5%）	1名（2.1%）	0名	0名

Q 各講義の満足度を選択してください。

講義名	満足	やや満足	やや不満	不満
ボランティアについて知ろう！	39名 （81.3%）	9名 （18.8%）	0名	0名
交流の家を知ろう！	36名 （75%）	11名 （22.9%）	1名 （2.1%）	0名
ボランティアの活動を知ろう！	38名 （79.2%）	10名 （20.8%）	0名	0名
青少年を知ろう！	37名 （77.1%）	11名 （22.9%）	0名	0名
安全のための知識を学ぼう①/たき火	45名 （93.8%）	3名 （6.3%）	0名	0名
野外炊事をしよう！	40名 （83.3%）	8名 （16.7%）	0名	0名
安全のための知識を学ぼう②	37名 （77.1%）	11名 （22.9%）	0名	0名

Q セミナーを通して最も心に残ったことはなんですか。

（事後アンケート） ※一部抜粋し、原文のまま掲載

私がセミナーを通して最も心に残ったことは、野外炊事や焚き火などの活動を通して、班の仲間と協力することの大切さを実感したことです。初めは話したことのない人がいて緊張していたが、一緒に活動する中で自然と会話が増え、お互いに助け合いながら取り組むことができた。協力することで活動がより楽しくなり、仲間とのつながりの大切さを学ぶことができた。
まいちゃんの話や、朝だと思ったなどの様々なケースの想定をしたことです。これまで考えたことがなかった、青少年教育としての考え方を体感した機会でした。教育学部で子供について学んでいる中でも、ここまで現実的なことを考えたことがなかったのでとても貴重な機会でした。
安全のための知識を学ぼう②でさまざまな事例や実体験を聞いてみて、改めて気にすべき問題がたくさんあるのだと実感することができました。性被害にあってから9ヶ月間黙っていたのと同じように、被害にあってからなかなか言い出せないという子達もたくさん居ると思います。自分1人で問題を抱え込んでいる子を見逃さないように、一人ひとりしっかり観察して丁寧に関わることを大切にしていこうと思います。
野外炊事で、初めての頃よりだいぶ緊張がほぐれてきたと同時にチームで役割分担をし、スムーズに行うことができ、美味しいカレーを作れたことです。自分たちで火をつけることは最後までできなかったけれど、仲間と頑張って一つのことを協力して行うことができ、とても良い思い出になりました。
遠藤教授の青少年について知ろうです。実際に起きたエピソードをもとにどんな対応をすればいいか、子供の考えはなにか考えまとめることができました。考えをまとめたあと、班の人、全体と共有することで自分にはない考えがたくさんあり、多様な意見を取り入れることができることに感動しました。難しい場面では自分だけで抱え込まず様々な人の意見を聞くことが大切だと実感することができたので、これからの活動に活かしていきたいと思いました。
特に印象に残ったのは、「子供にとって何が必要かを考えることが目的であり、そのためにボランティアとして何をやるかが手段である」という考え方です。活動を行う中で、自分自身の達成感や満足感を優先するのではなく、「それは本当に子供のためになっているのか」を常に問い続ける姿勢の重要性を感じました。また、所長の話の中であった「答えを探すのではなく、問いを見つけることが大切」という言葉も印象深かったです。正解を求めるだけでなく、自ら課題を発見し考える力こそが社会教育では求められているのだと理解しました。

Q セミナーを通してこれから考えていきたいことは何ですか。 ※一部抜粋し、原文のまま掲載

ボランティアやりたいな—と思いました。ボランティアは、なんとなく大学生のイメージがあって高校生の私には少し手が出にくいものでした。でも、今回のセミナーを通して、ボランティアやってみよう！—と思えました。
野外活動の際にお皿が余ってしまった時に、自分も責任感が足りていなかったと感じました。自分が教員になった時に、どのように生徒に心に響くように伝えることができるのか、どのような声をかけるべきなのか、反省させるべきなのか、今後に繋がっていくようにするためにはなにを伝えれば良いのか考えました。これからもボランティアをしていく上で、今回学んだことを応用して実際の場面でも冷静に子供達と関わっていきたいと思いました。
子供達との接し方や、青少年教育、社会教育についてです。今まで私は先進国の教育などを多角的に学校で研究をしてきたと思っていましたが、青少年教育、社会教育については全く目を向けていないことに気づくことができました。今年の自主研究ではこの2つも取り上げていきたいです。
子供達との関わり方に気をつける。子供達が安全にキャンプに参加できるかどうかを考える。もし子供達が危険だと思ったらその行動をやめたり、レベルを下げたりするなど子供達に合わせて判断をする。
今回のセミナーでは、キャンプやボランティア活動の実習の中で、自分が思っているよりも子供たちに対しての危険やリスクがたくさん身近に存在しているということを実際に焚き火や野外炊事を通して感じました。自分は、大丈夫だろうと思っていたことでも、それが大事に繋がってしまったり、子供の成長を乏しくさせてしまったりすると思いました。子供たちに伝えなければならぬことだらけであることをしっかりと認識して、子供のために自分がサポートし、活動を行っていけるようにしたいと思いました。

Q その他感想など自由にお書きください。 ※一部抜粋し、原文のまま掲載

大学に入ってボランティアにとりあえず挑戦してみようという思いで、参加しましたが、ボランティアについてきちんと考えたことがなかったと気づきました。たくさん考えさせられた良い機会でした。楽しい2日間、ありがとうございました。
一泊二日私にとって学んだことがたくさんあった。お皿を最初に数えないと困ることや人とのコミュニケーションの仕方など学べた。最初は1人で申し込んだからこそ直前までキャンセルしようと思っていたが班の人たちの個性的なキャラといい人たちでとても楽しい一泊二日を過ごすことができた。今回の講座で学んだことを次は子供たちがいる前で活かせるようにしていきたい。
単位が貰えるからという安直な理由で参加したことを恥ずかしく思いました。セミナーを通して子供関わることはどのようなことなのか子供が大変だと思うことはなんなのかというのをしっかり考えて行きたいなと思いました。
2日間とは思えない濃いものになった。終業式で泣きそうになった。知っているボランティアの方がいて安心した
最初は来てすぐ帰りたいと思っていたが、レクリエーションやグループ活動を通すことで、段々と和んでいき気づいたら楽しんでいた。ボランティアのイメージは、最初ただ人助けをするだけであまり深い内容がないと思っていたが、子供の成長を近くで知り自分が成長するだけでなく、周りの人も成長を感じられやり甲斐があり、楽しいものだった。

(2) 今後の教育事業への参加意欲

Q 今後当所のボランティア活動に参加したいと思いますか。

積極的に参加したい	機会があれば参加したい	あまり参加したいと思わない
25 名 (52.1%)	23 名 (47.9%)	0 名

Q 今後興味のあるボランティア活動を選択してください（複数選択可）。

活動名	参加希望人数
防災・減災教育キャンプ（7 月）	26 名 (54.1%)
イングリッシュキャンプ（9 月）	33 名 (68.8%)
オープンハウス 2026（10-11 月）	16 名 (33.3%)
ボランティア自主企画（11 月）	13 名 (27.1%)
ほっこりキャンプ ※ひとり親向け（12-1 月）	21 名 (43.8%)
プログラミングキャンプ（2 月）	9 名 (18.8%)
宿泊利用団体の支援 ※学校の宿泊学習の補助など	11 名 (22.9%)
交流の家の環境整備作業	10 名 (20.8%)
今のところあてはまらない	6 名 (12.5%)

6.成果と課題

(1) 広報手法の拡充による参加者の確保

今年度は 50 名の応募があり、募集定員 40 名を大きく上回る成果を得ることができた。昨年度は 44 名の応募があったが、広報手段の分析・活用や直接広報の促進に加え、参加者が一部の学校に偏っていることが課題として挙げられていた。

今年度は、主に大学への広報を強化し、大学ポータルサイトへの掲載依頼を静岡県、神奈川県、山梨県、東京都の各大学に対して広域的に実施した。また、静岡県内の一部大学については担当職員が直接訪問し、対面で広報を行った。さらに、県・市の青少年教育施設や市が運営するボランティア団体、大学のボランティアサークルに対し、Instagram 等も活用しながら広報協力を依頼するなど、広報範囲の拡大を図った。その結果、社会教育実習の一環として 20 名の申込みがあったほか、これまで応募実績のなかった大学や県立施設からの申込みもあり、広報対象の拡大による効果が見られた。

一方で、広報は早期から実施していたものの、開始当初は応募につながりにくい状況が見られた。そのため、来年度は対象ごとの募集時期や学生の動向を踏まえ、より効果的な広報時期を検討する必要がある。

(2) 主体的な学びを促すプログラム構成

今後、様々な青少年教育の現場で青少年指導者を支える人材を養成するため、本セミナーでは「子供のため」という問いを軸に据え、各講義において様々な問題提起を行い、参加者が主体的に考えることができる構成とした。振り返りからは、多くの参加者が各講義で投げかけられた問いを通して、ボランティアとしての在り方や子供とのかかわり方を見つめ直す機会となったことがうかがえた。

一方で、問いを中心とした構成としたことで座学形式の講義が多くなり、体験活動の機会が少なくなったことは課題であった。青少年教育施設の特性である「体験を通して気付きや学びを得る」という強みを生かし、体験活動を取り入れながら学ぶ機会をより充実させる必要があると考えられる。

また、本セミナーでは子供とのかかわり方を考える機会は多く設けられていたものの、実際に子供とかかわる体験を取り入れることはできなかった。そのため、参加者は自らが活動の参加者として学ぶ場面が中心となり、ボランティアとして子供とかかわる姿を具体的にイメージしながら学ぶことが難しい面があった。

今後の改善策として、2 日目に実際に子供とかかわる活動を取り入れ、そのための準備を 1 日目に行う構成が考えられる。実際に子供とかかわるという明確な目標を設定することで学習意欲を高めるとともに、実践を通して成功体験や失敗体験を振り返り、子供の視点に立った考え方をより深く学ぶ機会につながると考えられる。

一方で、実施に当たっては、参加人数の調整や関係機関との信頼関係の構築に加え、ボランティア登録前の参加者が子供とかかわることに伴う安全管理や責任の整理などの課題もある。より良いボランティア養成とは何かという探究に終わりは無いが、来年度以降、今年度を超えるにはどのようにしていけばよいかを模索しつつ、挑戦できることから試していきたいと考えている。